



2017 年度入学始業礼挙

春休み

久しぶりの日本への帰国。羽田空港に降り立ち到着ゲートを出ると、すぐに家族が笑顔で出迎えてくれた。私はとてもホッとした。話したいことが沢山ありすぎて、何から話していいか分からなかつた。それから私は何日もかけて2ヶ月間の濃い経験を家族に話した。日本を1人で出国して学校に着くまで、緊張で張り裂けそうな心をずっと抑えていたこと。入寮して初めての1週間は慣れなくてとても辛かったこと。自分の殻をやぶつて、色々なことに挑戦したり努力したりして、自分の中の中何かが変わった気がしたこと。嬉しいことも悲しいことも分かち合える友達が出来たこと。辛いことも自分の成長のための試練だと受け入れられるようになつたこと。そして改めて立教英国学院で高校生活を過ごしていく決意を固めたこと。私は話すことで自分の気持ちが整理されて、とてもスッキリした。

来学期からいよいよ高校生になる。高校生活、何に挑戦してみようか?ずっと春休み中考えていた。何事も自分から積極的に動かないと時は過ぎていくばかりで時間がもつたない。せっかく英國にいるのだから、英検などの資格取得はもちろん力を入れる。そして校外授業やホームステイなどを通して、本場の英國に触れて少しでも国際性を身につけたい。さらに、始めたばかりのバイオリンのプライベートレッスンは、これからもずっとと意味として取り組んでいきたいと考えている。それに加えて、第二外国語を新しくプライベートレッスンでとりたい。それ以外にもフライデースポーツなどを通してみんなと楽しく汗を流して青春したい。学校行事は初めてのものばかりだろうが、みんなと切磋琢磨しながら、良い思い出を沢山作れるように精一杯取り組んでいきたい。

これから始まる私の高校生活!わずか三年間だけの高校生活だから。一生に一度の貴重な高校生活だから。後悔のないよう、自分なりに自分らしく丁寧に、そして前向きに一生懸命とり組んでいこうと決意した春休みであった。

第二七六号 一〇一七年七月十六日
発行者 立教英國学院
RIKKYO SCHOOL IN ENGLAND
GUILDFORD ROAD, RUDGWICK RH12 3BE
<http://www.rikkyo.co.uk>

高等部一年二組 遠藤 夏夏
ケンブリッジ大学語学研修プログラムに参加させて頂き、ケンブリッジ大学生の思考力や人間力の高さに憧れ、そして英國に心がときめいた。その結果、私もすぐに英國で学びたいと思い、中3の3学期から立教英國学院に転入学させて頂いた。

今回は2ヶ月という時間だったけれど私は澤山の経験をし、時には涙して時には大笑いしながら大家族の中でとても濃い貴重な時間を過ごせたと思う。

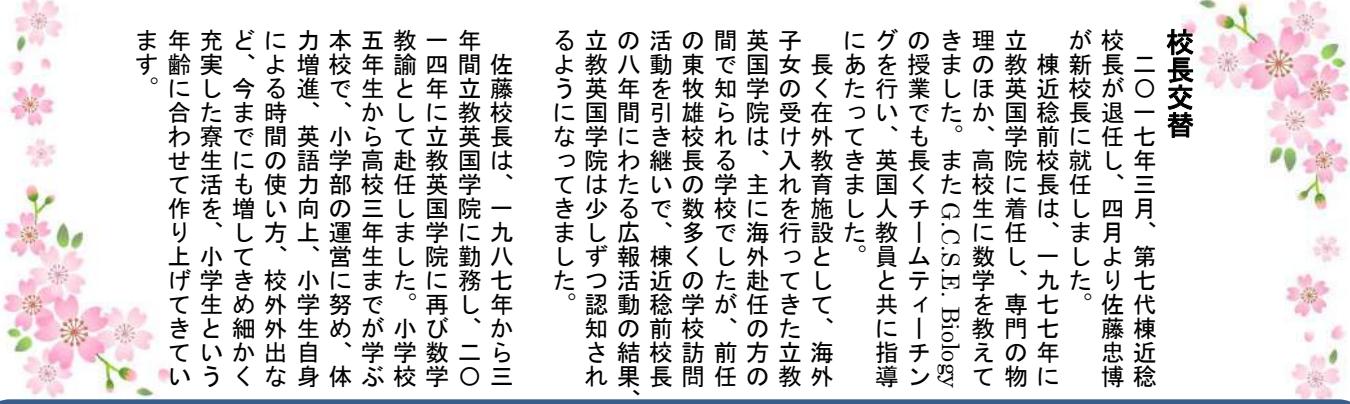
来学期からいよいよ高校生になる。高校生活、何に挑戦してみようか?ずっと春休み中考えていた。何事も自分から積極的に動かないと時は過ぎていくばかりで時間がもつたない。せっかく英國にいるのだから、英検などの資格取得はもちろん力を入れる。そして校外授業やホームステイなどを通して、本場の英國に触れて少しでも国際性を身につけたい。さらに、始めたばかりのバイオリンのプライベートレッスンは、これからもずっとと趣味として取り組んでいきたいと考えている。

それに加えて、第二外国語を新しくプライベートレッスンでとりたい。それ以外にもフライデースポーツなどを通してみんなと楽しく汗を流して青春したい。学校行事は初めてのものばかりだろうが、みんなと切磋琢磨しながら、良い思い出を沢山作れるように精一杯取り組んでいきたい。

これから始まる私の高校生活!わずか三年間だけの高校生活だから。一生に一度の貴重な高校生活だから。後悔のないよう、自分なりに自分らしく丁寧に、そして前向きに一生懸命とり組んでいこうと決意した春休みであった。

一目次一

| ページ | ページ | | |
|--------------------|----------------------------|--------------|----|
| 2017 年度入学始業礼挙 | 1 ハーフタームのホームステイ | 6~7 | |
| 立教英國学院 校長の交替 | 2 今年の生徒会の活動 | 8 | |
| 2017 年度第一学期行事 | 3 ウィンブルドン・テニス観戦のかわりに | 7月のミニ・アウティング | 9 |
| 球技大会 | 4 創立 45 周年 写真で見る立教英國学院のあゆみ | 10~11 | |
| Japanese Evening | 5 第4回 チャプレンより | 12 | |
| 小咄 飛行機に乗れない日のハイキング | 6 イギリス小咄 ホームステイのおじさんにお聞いた話 | Sunday Roast | 12 |



校長交替

一〇一七年三月、第七代棟近稔校長が退任し、四月より佐藤忠博校長に就任しました。棟近稔前校長は、一九七七年に立教英國学院に着任し、専門の物理のほか、高校生に数学を教えてきました。またG.C.S.E. Biologyの授業でも長くチームティーチングを行い、英国人教員と共に指導にあたってきました。

長く在外教育施設として、海外子女の受け入れを行ってきた立教英國学院は、主に海外赴任の方の間で知られる学校でしたが、前任の東牧雄校長の数多くの学校訪問活動を引き継いで、棟近稔前校長の八年間にわたる広報活動の結果、立教英國学院は少しずつ認知されるようになってきました。



前校長 棟近 稔先生より

私が立教英國学院に来たのは1977年です。今ここで学ぶ立教生は生まれていない人ばかりですが、ちょうど40年になります。ちょうど赴任した年が5周年で、学校が誕生して5年でした。今年は創立45周年を迎えます。40年の節目にあたり、そして校長の任期も終了しますこの節目に、退職をすることにしました。私の今までの40年間という社会人生活は、全てが立教英國学院でした。そして人生の三分の二がここ立教英國学院なのです。立教以外の生活を知らない。足腰が立つうちに立教以外の生活もしてみたいなと思っています。

学校が小さいときから見守ってきて、学校がどんどん成長していくのを見て、自分自身も学校に成長させてもらって今の自分があると思っています。その間ずっと生徒の皆さんや先生方、みなさんから支えられてきて、だから今があります。それは学校も同じで、みんなが支えてきたから、今の立教があります。私は立教の制服が大好きなんです。とてもカッコいい。とても言葉では言い表せません。

3学期になって高校3年生がいなくなったり、次はどうなるかなと見ていたら、高校2年生が急にしっかりしてきました。高2の当直は走って鐘鳴らしに行きますし、食事の前も走って食事の準備の手伝いに行っていました。毎朝、今朝のベッドメイクを褒めるとき、高2がますます褒められるようになってきました。そういう成長と変化を見守ってこられたことがとてもうれしいことです。4月から高校2年生をはじめとして、みんなで新たな学校を支えて行って下さい。立教英國学院をよろしくお願ひします。

(2016年度卒業終業式でのスピーチより)

新校長挨拶



本校は、1972年、海外で仕事をされている保護者の皆様の子弟に、キリスト教の精神と日本の文化伝統を大切にした教育を、との思いから、本校初代校長、縣康先生により、設立されました。以来45年間、同じ場所にあり続け、成長した児童生徒たちを世界へ送り出してきました。

1987年3月に大学を卒業し、社会人として初めて勤めたこの立教英國学院は、私の人生に強烈なインパクトを与えたました。

私がこの学校へ初めてやってきたのは、本校が創立15周年を迎えた年でした。当時はインターネットなどというものがまだなかった時代です。大学の掲示板で見つけた、「立教英國学院」の文字、「英國」という漢字二文字だけが、この学校はイギリスにあるのだということを示していました。そして、学校の姿は、当時私が手にすることのできた唯一の資料、立教英國学院10周年のしおりに掲載されていた写真でしか知ることができませんでした。

日本から出ることも初めてだった私は、南回り、26時間かけて到着したヒースロー空港を出て5分後に、ゆったりと草を食む羊たちの姿を見てまず驚きました。溢れる緑と咲き乱れる花、レンガ色の町。空港に迎えに来てくださった宇宿前校長先生の運転する車の窓から見えるもの、目の前に次々と現れるもの、何もかもが新鮮でした。憧れていた海外、というのはこういうものなのか、と、圧倒されたことを思い出します。

いよいよ新しい年度が始まり、驚きはさらに深りました。世界各地から集まってきた児童生徒たちを迎えて、この広い、南イングランドの田園風景の中に位置するこの場所が、日本人の子供たちで溢れる様は壮観でした。当時の児童生徒の数は、300人を超える、食堂にテーブルが入りきらず、ステージの上にも3列のテーブルが置かれています。それだけ、日本が元気で、エネルギーに満ちた時代だったのだと思います。でもその熱は、はるばるここまでやって来なくては分からないものだったのです。

私は、3年間の勤務のあと、日本で再び教職につきましたが、日本で教職にあった間ずっと、地球の裏側で営まれている、この立教での児童生徒・教職員の共同生活のことが頭から離れませんでした。4年前、再び立教の門を叩いたとき、懐かしさに胸が震えました。

時代は変わり、再び私の目にした立教は、以前とは変わったところもたくさんありました。児童生徒の数は、当時と比べると約半分です。日本からの、児童生徒の直接募集が棟近稔前校長の在任中に始まり、いまでは総児童生徒数の約三分の二が、直接日本からやって来ています。情報化が進み、ここ英国にいても、日本で起こること、そして世界中で起きていることは、瞬時に伝わってきます。子供たちの家庭とのやりとりも、本当に近くで便利になりました。学校の様子も、ウェブサイトで、そして学期末に発行されるDVDなどでご家庭へと伝わりやすくなりました。しかし、ずっと変わらないことがあります。それは、この空気、この臭い、この熱、「立教英國学院」という学校を本当に理解していただく、分かっていただくには、ここに来ていただくのが一番である、ということです。

開校以来大切にしてきたものの中に、立教らしさはあります。と同時に、時代の要求と共に、本校には、変わらなくてはいけないこともあります。ともすると、「立教は、日本でもなく、イギリスでもない」場所になりがちです。日本と英国の架け橋であろうとする開校以来の精神に則り、「立教は日本でもあり、イギリスでもある」場所として、ここにずっと、「立教英國学院」があり続けること、それが、本校を愛し、本校を懐かしく思い、本校を大切にしてきてくださった方々への一番の感謝と考えます。

五年後に迎える創立50周年、そしてその先75年、100年と、末永くここに本校があり続けることができますよう、英国の方々、支えてくださる皆様には、今後とも温かいご支援をお願いいたします。

2017 年度第 1 学期 行事

9 日 入学始業礼拝

10 日 健康診断、新学期オリエンテーション

11 日 高等部実力テスト

17 日 特別時間割 (Easter Monday のため)
Bluebell Walk11 日 小中学部の授業スタート
12 日 高等部の授業スタート

22 日 球技大会

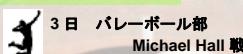
16 日 部活動・委員会紹介
～4月30日まで仮入部期間

25 日 午後ブレイク

29 日～ 高等部3年マーク模試の実施

4月下旬～5月中旬
Pennthorpe School へ小学生・中1・中2が英語学習に外出

1 日 土曜日の時間割 (Bank Holiday のため)



5 日 Japanese Evening

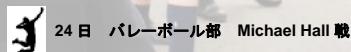
7 日 生徒会主催 Guildford Shopping

12 日 1学期ミニ・アウティング (高2以下)
高等部3年記述模試の実施

20 日 高3希望者対象：英国の大学合同説明会へ外出

20 日 高1以上対象 OPEN DAY 本部・係説明会

21 日 第75回漢字書き取りコンクール



5月27日～6月4日 ハーフターム

May**July**

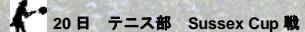
2 日 英語検定二次試験

3 日 ミニ・アウティング

4～5日 期末テスト答案用紙返却

6 日 スクールコンサート

ケンブリッジ英検 KET & PET

19 日 スピーキングテスト
24 日 筆記試験 漢字検定**June**

7 日 高1以上対象：立教大学統括副総長講話

8 日 終業礼拝、創立45周年記念礼拝
児童・生徒帰宅8～15日 1学期末のホームステイ
高等部3年 難関大向け特別補習

球技大会

4月22日土曜日、気持ちの良い青空のもと、立教英国学院では球技大会が開催されました。児童生徒たちはこの日までそれの競技ごとに一生懸命練習してきました。また新入生にとってはこれが初めての学校行事とあって、皆気合は十分です。今年はオレンジチームとバイオレットチームの二色で戦いました。



バスケットボール、バレー、ネットボール、サッカー、ドッジボール、ポーチボール、キックベース、ソフトボールの各競技では、選手たちが練習の成果を見せようと激戦を繰り広げ、抱き合いながら

で戦いました。

この球技大会を通して、学年・男女を超えた交流が更に深まることでしょう。

人生も一気に学校に馴染んだように思えます。この日の経験を糧に、これから的一年を充実した楽しいものにしていってほしいと思います。



試合からのプレゼント

中学部二年 野口 紗子

「ピッ」始まりの合図と共に宙に舞いながら、みんなの視線が一気にそこに集中した。

昨年に引き続き、2回目のポートボール。けれど、昨年とは1つ違うことがある。入生としてではなく、在校生としての球技大会なのだ。先輩から教えてもらうのではなくて、自分が教える。そう思うと、なんだかちょっとれしかった。

初日の練習は、自己紹介が始まった。その後にちよつとしたボール慣れ。そして、最後に雑談だ。雑談することで一気に仲を深めて、初日の練習は終わる。雑談が結構楽しくて20分ほど話していた。そのおかげで、新入生のことによく知ることができたと思う。

次日の練習は、相手の名前を呼んでパスする練習をした。この練習は、みんなの名前をおぼえるためのものもある。最初は、名前をきいてパスしていたが、途中からはみんな名前をきかないでパスできるようになつていた。

それからの練習は、チームに分けておこなう事になった。ドリブル練とパス練をして、雑談。これは、自分のチームの人と仲を深めるためのものである。これでもう、完璧に仲が良くなつたといえるようになつただろう。

その後は、チーム対抗の練習試合をした



に集中した。試合開始だ。午前の部での試合。前半は、勢いをつけて点数をたくさんとつた。が、後半は相手にまさかの逆転をされてしまい、敗北。その後、午後の試合にむけて作戦を練り直した。その作戦は、午前の部とは違い、私がゴールをすることになった。ボールを受け取れるか不安な気持ちを残したまま時間は過ぎていき、午後の部に。あつという間に試合は始まり、私は椅子の上に立つてボールを待っていた。すると、私の名前を呼ぶ声と一緒にボールが飛んできた。気づいたら、先輩からの力強いボールを手に持っていた。ボールを受け取ることができた時のうれしさ、それは昨年に味わうことのなかつたものだった。私はその時に、今まで知らなかつた試合での別のうれしさを知ることができた。結果は負けだつたけれど、この試合から素敵なプレゼントをもらつたので、良い試合だつたと思う。

人によって、このうれしさを感じる時は違ふと思うけれど、きっと誰だつてこのうれしさを感じる時は来る。その時が、その時にハマる瞬間じゃないだろうか。

Japanese Evening



5月5日金曜日の夜、Japanese Eveningが行われました。これは地域の方々をご招待して、日本の文化を紹介する機会として行われ、今年で13年目を迎える行事です。

今年も90名近い方々が会場に足を運んでくださり、この日のために準備してきた児童生徒たちもとても嬉しそうです。



日本を紹介するプレゼンテーションで始まり、琴の演奏、剣道のデモンストレーション、茶室での茶道の実演、盆踊り、箸の体験、折り紙、昔あそび、書道、あやとり、そろばんとフラッシュ暗算の各企画でも児童・生徒が一生懸命英語で説明をしている姿が印象的でした。

楽しい時間はあっという間に過ぎ、多くのお客様が笑顔で会場を後にしましたが、児童生徒も達成感に満ち溢れた表情をしていました。



英語で自分の国のかつを発信することは、立教英国学院にいるからこそできる特別な体験の一つです。特に、新入生にとって直接自分の言葉でコミュニケーションを取る楽しさを感じることができた最初の機会でした。このようなチャンスを生かして、異国の文化を理解し、自分の国のかつを発信できる、グローバルな人材に成長していってほしいと願っています。

ハーフタームのホームステイ

27.05~04.06.2017

僕の誕生日だったので、何とピクトリアケーキをごちそうしてくれた。さらにサッカーボールもプレゼントしてくれた。とてもうれしかった。感動した。

(中2男子)

ホストファミリーによって何をするとかどんなことを学べたか違うと思うけれど、やはり自分次第でいろいろなことが変わるんだなと学べました。

(高1女子)

このおうちは3年間で2回お世話になりました、アップルデイや手紙のやり取りなど、交流を続けることができた。ホストファミリー、家、共にすばらしい。

(高3女子)

今年のハーフタームは全校の三分の二以上の生徒がホームステイを希望しました。ホストとなる受け入れ家庭の数が不足してしまい、残念ながらお断りする希望者もあり、申し訳ないことになりました。一方で、ステイを体験した児童・生徒たちはホストファミリーと良き時間を過ごしたようです。どのようにして触れ合つたらいいのか分からなかったり、英語が通じなかったり、いいことばかりではなかったようですが、頑張って英語を話し、時には言葉だけではなく、身振り手振りで、表情、感情表現、一緒にスポーツなどで過ごすひとときを楽しんだようです。

アンケートのコメントや作文から、児童・生徒の感想をご紹介します。



一週間本当に楽しかったです！イギリスの方の家に住んで、その方々の文化を直接知るだけでなく、より自立した生活が送れてよかったです。

(高1女子)

結婚式、ホームステイ先のお子さんのプール大会の応援、いろいろと出かけた。2回目のホームステイだったから、もっと親しくなった。家族みんなやさしい方だった。また行きたい。

(中3男子)

昼は扉を開ける習慣を学んだ。(中2男子)

ホームステイ中には、「ありがとうございます」や「おねがいします」など一つ一つの言葉が大切になるのだと思いました。(中1女子)

「大変だったね。」「よし、ハイキングをしよう！天気がいいからお昼は外でピクニックだ。」

フライトまで学校で過ごすことになった児童・生徒たちを誘つて、有志の先生たちがハイキングを計画。目標はPritch Hill。午前十時出発。途中でサンドイッチを買って、車で麓まで行って、さあ歩くぞ。季節も良し。天候も良し。丘からの眺めも良し。なんて、気持ちのよい一日！初夏の丘歩きは最高です。



「BAの世界中のシステムがダウントしましたのが原因のようです。」

徐々に状況が分かつくると、保護者の方と連絡を取り合いながら、他の航空会社の便を確保。何人かは目的地に飛びましたが、フランス、ドイツ、日本に帰宅予定だった七人の児童・生徒が学校に戻ってきました。

「大変だったね。」

学校に帰ってきてすぐ夕食。二日後の便に振り替えになつてている者、まだ振り替え便がとれない者と様々。せつかくのハーフタームなのになあ！翌日の日曜日は空白の一日になつてしましました。

十三時五分。空港送迎の先生から入った一本の電話。「ブリティッシュ・エアウェイズの便が全てキャンセルになつているようです。」なんですか？！ハーフタームで自宅に帰宅する児童・生徒たちは、突然のトラブルに巻き込まれました。

「もう少しで目的の頂上。さあ、丘の上で競争だーっ」と元気よく走つて振り返ると、ゆつたり歩いている生徒たちの姿。あれ？「僕たち疲れました…」

見晴らしのよい丘の上でサンドイッチを食べて、午後もどんどん歩く。やがて丘の合ひ間の村に到着。一日すっかり歩いて、村のお店でアイスクリームを食べて少し休憩。一日中ハイキングをして、帰りは疲れました。足を川で冷やして、気持ちよく疲れて帰つきました。思わずトラブルに、思わず敵な一日を過ごしました。



「あ、ワラビ！」山菜採りも楽しい。「あげるよ」と、ワラビに目がない先生のもとにどんどん集まるワラビ。「これフリント？」授業で習った石器材料の石探しに勤む者あり。

やはり、単語を知っていても、とっさになると出て来なくなったりするので、会話は大変だなと思いました。でも「話そう」という意思があれば相手もそれに答えてくれるのだとしみじみ思いました。(高3女子)

簡単な内容を伝えるのにも、言葉に詰まってしまい、遠回しな言い方をすることが何度かあった。このことをバネにして、英語の勉強をもっとしっかりとやろうと思った。(高1女子)

英語の授業よりも実用的な英語をたくさん使った。(高2女子)

役に立つ会話表現を教えてもらった。(中3女子)

あまり英語が上手くなくても、伝えようと頑張れたり、伝えることに気がつけた。(高1女子)

ホストファミリーが英語について学習することに協力してくれたところもあり、Speaking が上達したと思います。様々な観光地に行ったので、英語の情報と共に文化・歴史を学べました。(高3男子)



夜は毎日ティータイムがあり、ホームステイ先の人と一緒にゲームをした。このように家族との時間を大切にする文化を感じた。(高2男子)

英語が伝わらない時が多くあり、一年後の自分の英語が少し気になってきた。(高1男子)



毎日みんなでゲームを夜にした。(高1男子)



一緒にガーデニング。蜂の巣を見に行く。海へ出かける。棒たおしゲーム。犬の散歩。丘へ出かける。日本食を作った。鶏の卵を取りに行って報告。よく喋った。(高3男子)



毎日、外出の予定をつくってくれた。車を出して連れて行ってくれた。この移動中に会話を楽しんだ。(高1女子)

お寿司をつくってもらったり、ぎょうざを作ったりしました。(高3女子)

ホストファミリーと一緒に料理をして、たくさん話した。(中1女子)

一緒にごはんを食べた。おばあちゃんの誕生日パーティー。クランレーに行った。バーベキューをした。美術館に行った。(高1女子)



お料理が好きで、得意な Host Father が毎食すばらしい食事やデザートを沢山作ってくださいました。(高3女子)

寿司、ケーキを一緒につくった。(中3女子)

2日目はギルフォードに買い物に行った。…単品の何かを作りたかったので、トマトとチーズ、クラッカーを買って、トマト&モッツァレラと、クリームチーズとクラッカーを作り、夕食に添えた。(中2男子)



料理が全て手作りで、おいしすぎて太った。(高3女子)

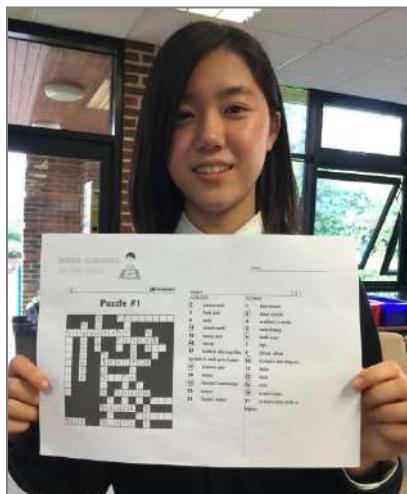
ブレイクのクッキーをきれいに食べよう！啓発ポスター

僕は5年前の春、立教英國学院に入学しました。当時から NEWHALL の壁に貼ってあった「クッキーはきれいに食べましょう。」というポスターは今にも剥がれそうな状態で、さらにはクッキーのかけらなどが床に散らばっていることが多かったため、新しいポスターを作り改善しようと考えました。

ただのポスターを作るだけでは形だけで終わってしまうと思ったので、生徒の心に響くようなものを作り設置しました。

するとその日から生徒みんなさんのブレイクの使い方がガラッと変わり、きれいな状態を保つことができています。

生徒会会長（高等部2年）



Word Climbing さあ、立教生よ挑戦！

"Word Climbing"は英語のクロスワードパズルとワードサーチを毎週交互に生徒に解いてもらうという取り組みです。始めた理由は、生徒が遊び感覚で気軽に楽しめ、それに加えて単語力の向上にも繋がるからです！一学期の計6回の全てに取り組んでくれた生徒がかなり多くてとても嬉しかったです⑤

生徒会高等部副会長（高等部2年）

今年の生徒会の活動 第45代生徒会



先生 GPS

僕が生徒会に立候補する時に、一番の公約として掲げたのがこの先生GPSです。

これは生徒が放課後、または夜の自習時間に先生に質問をする際に、先生の居場所をホワイトボードに貼ってあるマグネットで示し、より効率良く質問を出来るようにするために設置しました。

また先生方が置くマグネットの色で先生に質問が可能かどうかを区別できるようにしています。

まだ試験運用なので改善点もありますが、来学期には完成版を作っていくたいと思っています。

完成版に乞うご期待！

生徒会高等部副会長（高等部2年）

日本語メニュー表

これまで、立教英國学院では1週間の食事のメニュー表が英語で発行されていました。これでは、わかりにくい人がいるという事があったため、そのメニュー表を日本語訳して発行すれば、かなりわかりやすくなると思い、日本語メニュー表を始めました。それ以外にも日本語訳してもわかりにくいメニューは、写真を添えて発行することによりわかりやすくなりました。

しかし、まだ課題もあります。メニューの日本語訳が難しいことがあるので、そこを改善ていきたいと思います。

生徒会小中学部副会長（中学部2年）
生徒会小中学部副会長（中学部2年）





ワインブルドンテニス観戦のかわりに…

7月のミニ・アウティング



期末試験明けの七月三日は、ワインブルドンで行われるテニス大会の観戦を予定していました。今年は英国情勢を鑑みて、残念ながら観戦をキャンセル。その代わりに、訪問先を慎重に選びながら、ミニ・アウティングが組まれました。高二是 Arundel へ Worthing の街でお昼は飲茶を楽しみ、高一も Worthing へ、高一是 Thorpe Park という遊園地で一日を過ごしました。中学生は Seven Sisters へハイキングに、小学生は、Fishers Adventure Farm Park へ遊びに行きました。曇りがちながらも、あぜいしい青空ものぞき、学期末のひとときを過ごしました。翌日からは、中高生は期末テスト返却でした。



創立四十五周年

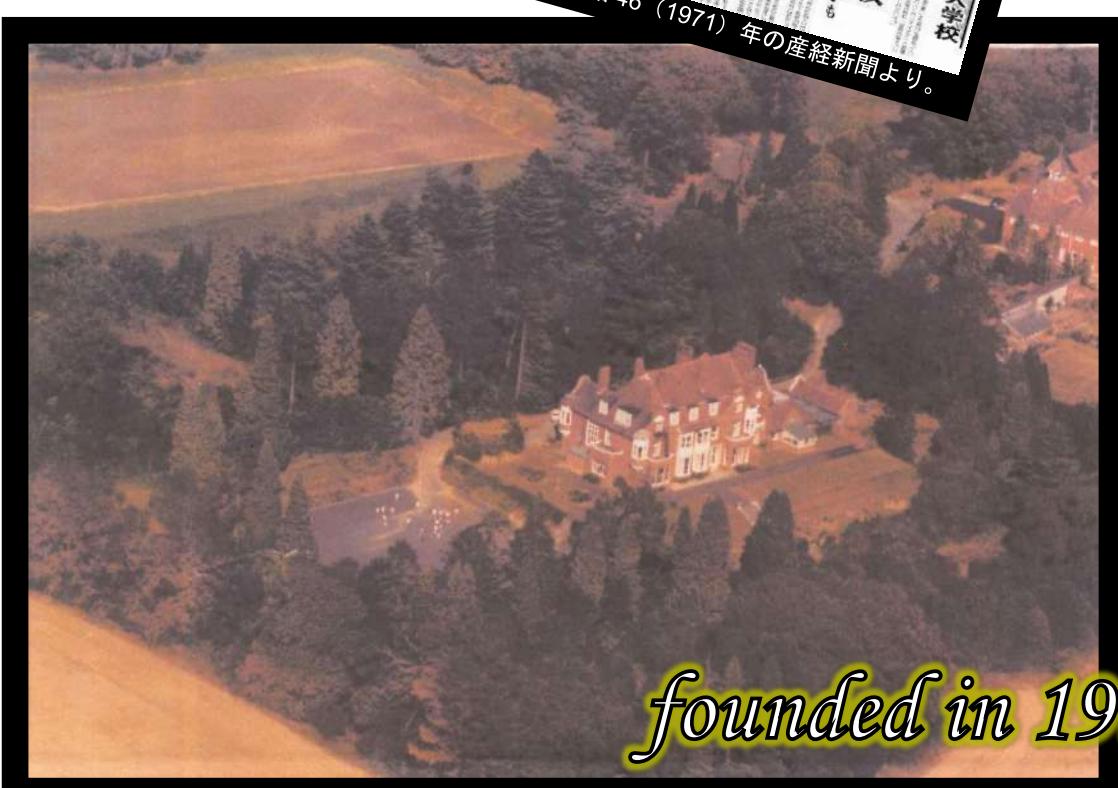
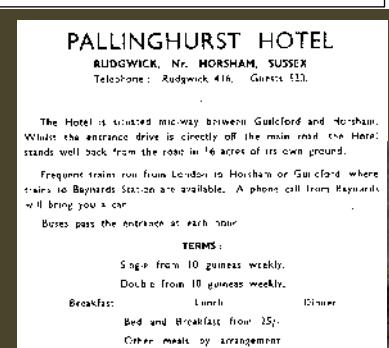
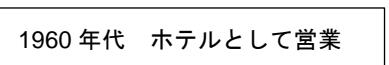
写真で見る

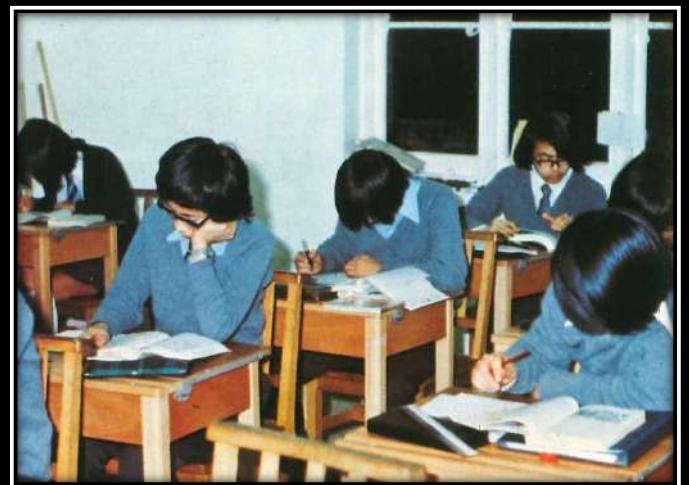
立教英國学院のあゆみ

前編

※全三編の予定です

二〇一七年の今年、立教英國学院は、創立四十五周年を迎えました。一九七二年に海外の日本人学校として開校した本校は、たくさんの方に支えられて今日の日を迎えてます。七月八日の終業礼拝では、創立四十五周年を記念する礼拝を挙げました。四十五年の間に少しずつ変化が訪れましたが、今も変わらないものもあります。ここでは、全三回にわたって、二〇〇六年に当時の中学部一年生がオープンデイで行った展示企画の資料を基にしながら、立教英國学院の四十五年間を写真で振り返ってみようと思います。



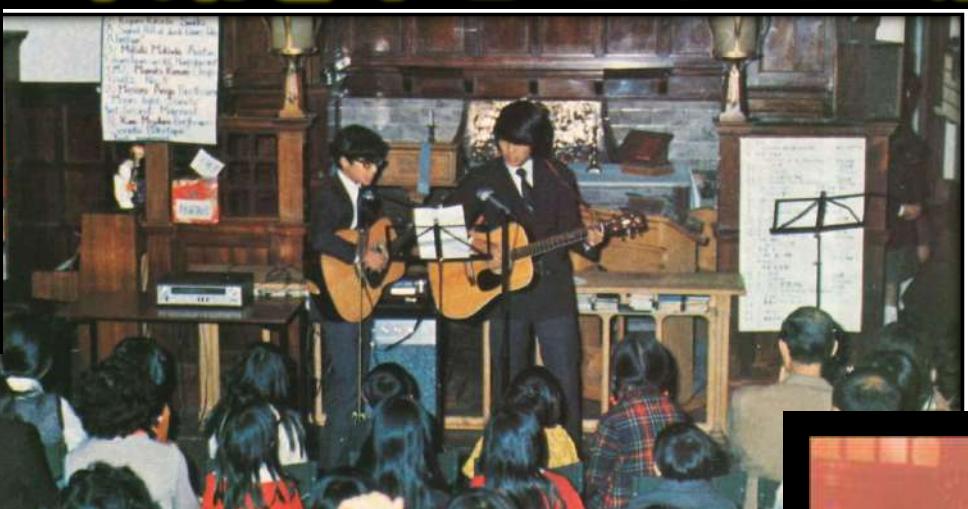


この教室はどこでしょう?
木製の机は今も教室で、椅子はチャペルで使っています。

本館を中心とした生活



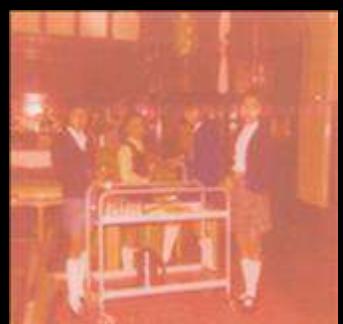
テーブルマナーを守って
食事。



ドミトリーで。
ガウンを着る習慣は今も



これは新館の一室。パイプベッドは軍からの払い下げ品でした。



ティーブレイクの様子



スクールショップの様子

チャプレンより

第4回



與賀田チャプレンは立教英國学院の学校付き牧師さまです。礼拝や聖書の授業ではさまざまなお話をしてくださいます。

学期末毎に児童・生徒の皆さんには、聖書の授業や日々の礼拝の説教、また英語に住むことを通して感じたこと、考えたことを作文として書いてもらっています。今学期、やはり多かったのはテロというテーマでした。

英国内また世界における貧困と格差の問題、宗教的な問題、民族的な問題など、様々なレイヤーが複雑に絡まり合っている現代は、単純に一つの理由で解きほぐすことは困難です。

授業でも度々伝えるのですが、何かの出来事に対して私達はついわかりやすい理由を求めてしまいます。人間は何かに対して納得し、安心したいという欲望を持つているからです。そのような物の見方はしばしば現実というものから私達を遠ざけるものであります。

また、何か一つの原因のみを確立してしまって、そこに対立軸ができてしまいます。たとえばそれは、宗教であったり、貧困であったり、文化であったりするわけです。宗教間の対立や、貧富の社会層の対立、文化の対立は生み出すべきではありません。大切なのは普段の人間関係でもそうであるように、何か一つの原因に単純化するのではなく、他者を他者として尊重し、総合的に生身の人間として関わりを持続けるという態度そのものでしょう。それは時に困難を伴いますが、今、多く

そのような英國に児童・生徒達は住んでいますから、他者を他者として捉える、ということへの感度は自然と深まります。今学期末の作文では、「死者や遺族を思いやか」といって、英国内のイスラム教徒を差別するのは良くない。偏見の目が広まらないければよいのだが」といった他者を思いやる気持ちや、未来への危惧が綴られています。

これはとても心強いものです。

この心強さの裏には、自分たちが英国において外国人として生きている、という自觉が作用しているのでしょうか。異なる文化的出自を持つ自分たちが、その文化を尊重された上で、大切な隣人として受け入れられている、これは大きな事です。

聖書の中で、有名な善きサマリア人のたとえ、というイエス様がされたたとえ話が

学期末毎に児童・生徒の皆さんには、聖書の授業や日々の礼拝の説教、また英語に住むことを通して感じたこと、考えたことを作文として書いてもらっています。今学期、やはり多かったのはテロというテーマでした。

英国内また世界における貧困と格差の問題、宗教的な問題、民族的な問題など、様々なレイヤーが複雑に絡まり合っている現代は、単純に一つの理由で解きほぐすことは困難です。

の英國民がその態度を保とうとしています。王室や国教会の聖職者たちがモスクへ足を伸ばし、共に祈る姿を見せてるのが象徴的です。それは隣人を愛するあり方だからです。

の英國民がその態度を保とうとしています。王室や国教会の聖職者たちがモスクへ足を伸ばし、共に祈る姿を見せてのが象徴的です。それは隣人を愛するあり方だからです。



あります。(ルカによる福音書 10章 25-37節)
旅の途中、とあるユダヤの人が強盗に遭い、身ぐるみを剥がされ倒れてしまいます。ユダヤの町へ行くということは殺される危険があります。

厄介ごとに巻き込まれたくないため、見て見ぬふりをして通り過ぎます。

しかし、当時対立していたはずのサマリ亞人の男が、その彼を手厚く看病し近くのユダヤの町へ行くということは殺される危険があつたからです。

このたとえの最後にイエス様は尋ねます。「誰が追いはぎに襲われた人の隣人となつたと思うか」。律法の専門家は答えます。「その人を助けた人です」。そこで、イエスはこう言われます。「行って、あなたも同じようになさい」。

自分が隣人として大切にされていることを知ること、自分もまた出会った人の隣人となつていくこと、愛するということ。

この精神がこれからも児童・生徒達の内にますます育まれていくことを心から祈り願っています。



4月に、福島寛美先生（国語）、関口萌先生（英語）、佐藤智花先生（保健室）が着任されました。よろしくお願ひします。



7月に、Mrs Beeney, Mrs Cavaillon, Ms Stantonが離任されました。今まで有難うございました。

イギリス小咄



ホームステイ先のおじさんにお聞いた話



日曜日の料理 Sunday Roast

Sunday Roastとは、日曜日の昼食に供されるローストした肉のこと。チキンのローストだったり、ポークだったり、ビーフだったりする。ポークやビーフの時は、薄くスライスされる。ロースト・ビーフのイメージだ。

日曜日は、教会から帰ってから家族みんなでサンデーローストを食べるが、昔はその後、月曜、火曜と同じものを食べた。水曜はまだ残っているかたまりでシチューを作つて食べる。木曜はもうカスしか残っていないので、それでシェファーズパイやコッテージパイを作つて食べる。だから、イギリス人は金曜日には魚を食べる、と言つてゐた。

(数学の先生がむかしホームステイをしていたファミリーから耳にしたお話)

立教英國学院通信の電子配信への切り替えにご協力下さい。ご意見、ご感想もこちらへどうぞ。

infodept@rikkyo.w-sussex.sch.uk